

はにわ

『輝く金の花！ キュアブルーム！』

背後に大輪のひまわりを背負い、花のような衣装に身を包んだ少女が声を張った。

『煌く銀の翼！ キュアイーグレット！』

翼が翻り、白い服を着た少女が両腕を広げる。そして、二人が背中合わせになり、ポーズを決めた。

二人の声が揃う。

『ふたりはプリキュア！』

キュアイーグレットが頭上に向けた人差し指を振り下ろし、

『聖なる泉を汚す者よ！』

キュアブルームが手のひらを大きく開いた。

『あこぎな真似は、おやめなさい！』

その威勢のいい声に、なのはは朝ごはんを用意する手を止めて、リピングを覗き見た。リピングではソファではなく床にぺったりとお尻をつき、ヴィヴィオがテレビにかじりついていた。なのはは菜ばしを片手に持ったままヴィヴィオに呼びかける。

「ヴィヴィオ！」

ちゃんとテレビから離れないと駄目だよー。」

うーん、とヴィヴィオは生返事をして、お尻をもそもぞと後ろに下がらせた。ほんの数センチ。なのはは呆れたように眉を歪めた。日頃からもっと離れて見るように言っているのに、気がつくといつもこうだ。

なのはは肩を疎めると、それ以上何も言わずに台所に引つ込む。ヴィヴィオはのめり込むと中々話を聞かないし、それに今は料理中だ。ソーセージも焼き終えたところだし、それが冷える前にオムレツも作ってしまいたかった。

なのはは冷蔵庫から昨日買ったばかりの卵を三つ取り出すと器に卵を割り入れた。牛乳も少し加えると、菜ばしで混ぜる。陶器の器と箸が当たる軽快な音が台所を跳ねる。

『どうしていなくなっちゃったの？』

心配したのよ。』

リビングから高めの女の子の声が響いた。当惑と心配が滲んでいるような、やさしげな音だった。なのはが料理を作る間にも、テレビでは話がどんどん進んでいるらしい。先程までは戦っているような爆発っぽい音がずつとしていたのに、流石30分アニメ。凝縮されているな、などとなのははほんやり思う。

『オムレツになにか入れたほうがいいかな。』

黄身と白身と牛乳が混じって、マールブルではなく淡い黄色になった卵に目を落とす。具は入っていない。なんとなくいつもの調子でプレーンオムレツにしようとしていたが、せつかくの日曜朝八時四十五分過ぎ、もつと手の込んだものを作りたい。

『でも、何がいいかな。』

食材はいろいろあるが、では何を食べたいというのもこれと言って浮かんでこない。ご飯を作る側にとつては、何でもいい、という回答が一番困るものだ、というのが骨身に染みてわかる。

『ヴィヴィオ、オムレツの中身何がいい？』

台所から尋ねてみる。返事はヴィヴィオの声ではなかった。

『舞のためラビ！』

「チョッピは舞のために大空の木の下の下ですつとはにわを探してたラビ！」

「ヴィヴィオの見つめるテレビ画面をちらりと覗くと、確かフラッピという名前だった精霊が映し出されていた。精霊の顔と、ヴィヴィオの横顔を見比べ、なのははこの分だと、ヴィヴィオは今話しかけても反応しないだろうことを察した。」

「・・・フェイトちゃん起こそうかな。」

「いまだに寝室から出てこない筋金入りの寝ぼすけさんを思い出して、なのははふ、と口元を綻ぼせた。手を布巾で拭くと、足音を忍ばせてリピングを横切る。」

「チョッピ・・・。」

「舞と呼ばれた女の子が、一言そう零した。話の出だしのところは、ヴィヴィオと一緒に見ていたから知っている。チョッピという女の子の精霊が、舞のお母さんが大切にしていた埴輪を壊してしまったのだ。その後から朝食の用意を始めたから、後のことは良く知らないけれど。」

「ふたりとも、私のためにずつと頑張ってくれたのね。」

「元氣を取り戻した二人が、相手を庄倒して笑顔を浮かべる。舞が自分のために頑張ってくれていた二人にうれしそうに言った。隣に居る咲が、力のある表情になつて声を張る。」

「フラッピとチョッピは、」

「その言葉を引き継いで、舞が戦っている相手を振り仰いだ。体の大きな、ウザイナーと呼ばれている怪物というかロボットというかに向かって言い放つ。」

「私達の大切な友達よ。」

「そして、二人が声を合わせた。」

「絶対に、守ってみせる！」

なのはは廊下に出ると、後ろ手にそつと扉を閉めた。

音が少し遠くなり、くぐもってあまりはつきりとは聞こえなくなる。アニメの世界から、いつも通りの朝に抜け出したような感覚があった。人の居る部屋の暖かさから、廊下の涼しい空気が頬を打つ。振り返れば廊下の奥にある窓から、木漏れ日が溢れていた。なのははそちらにある寝室に向かつて歩く。スリッパの音が廊下の空気を叩く。

大抵、あの番組なのははが朝食を用意すると重なってしまうため、ちゃんと見た回数は少ない。けれど、大まかになら話は知っている。咲と舞の二人がフラッピとチョッピと一緒に、泉の郷というフラッピとチョッピの故郷を取り戻すために戦う、なんていうストーリーラインだ。描かれているのは、そうしていく中で、日常の中にある大切なものに気づいていく二人の、そしてみんなの姿だ。

なのはは腰に手を当てると、寝室の扉の前に仁王立ちになった。それから深呼吸をして、その扉を押し開く。カーテンが引かれたままの薄暗い室内に充滿するのは、朝日にも負けず寝続ける寝ほすけさんの寝息だった。なのははベッドの傍まで歩み寄ると、フェイトの顔を覗き見る。

「もう、朝だよ、フェイトちゃん。」

声をかけてみるが反応はない。フェイトは横を向いて少し丸くなったまま、穏やかに呼吸をしている。金髪はシーツの上に広がり、柔らかな曲線を描く頬には安らぎがまどろんでいる。閉じられた目蓋。合わされた睫が綾を織り成す。晒された白い額が可愛く思えて、なのはは指先で頬を突いた。でも、返ってくるのは静かな呼吸と、シーツの立てる音だけだ。このままでは起きそうもない。なのはは嘆息すると、フェイトの頭のすぐ傍にあった、ヴィヴィオの枕を掴み上げ、ベッドの脇に立った。

「えーっと、なんだっけ。」

あれの必殺技……。」

なのは胸に枕を抱いて首を傾げた。ヴィヴィオがまるで男の子みたいに技名を告げて突っ込んで来る
ときのことを思い出しながら、なのはは枕を砲丸投げか何かのように肩に構えた。腰を心持だけ落として、
狙いをフェイトの顔に定めた丁度そのとき、技名が閃いた。そして、それを思いっきり叫ぶ。

「ブリキユア！」

ツインストリーム・スブラーツシューー！」

気合一閃、なのははフェイトの顔面に枕を叩きつけた。

人の居ない街。

不思議な感覚だ。街を作るのは人なのに、それが居なくなるとまるで空っぽで、空虚な風ばかりが溜まっている。結界を張った直後なのだから、当たり前だけれど。信号機の上に座って、フェイトは空の街を見下ろしていた。背後では暮れた空が紫に染まり、街並みがシルエットに変わる。青く、紫の影に。通りに並ぶビルの窓ガラスには残滓のような光だけが薄く結晶していた。

「アルフ。」

小さな声で呼びかけると、赤い毛並みの狼が空から道路に着地した。四足がアスファルトを叩く音は軽く、豊かな毛が翻る。淀むことなくフェイトを振り仰ぐその姿は、どこか悠然としていた。

「結界張るの、うまくいったみたいだね。」

さすがフェイトだ。」

誇らしげに口を開いてみせるアルフに、フェイトは「ありがとう。」と囁くように微笑んだ。街中で結界を張るのは初めてだから、きちんと対象以外を外部に弾けるか不安があったが問題はないようだ。リニスが教えてくれた魔法なのだから、出来て当たり前だと思えるのは、成功した後だからこそなのだろうけれど。

冷たい風が一陣、フェイトを突き上げた。黒い外套が音を立て翻る。裏地の赤が視界の端を掠めた。フェイトは風に煽られるよう、暮れていく空を見上げた。夕暮れの緋色すら遠のいた、藍に染まり行く空を。そして、瞳の奥に、その空の中に、まだ見ぬ世界を思い描く。

第97管理外世界。その空は赤いのだろうか、青いのだろうか。魔法の無い世界。名前だけしか知らない、遠い場所。フェイトは右手のうちにあるバルディッシュを握り締めた。遠い場所も何も、ここ何年もずっと、どこにも出かけてなどいなかった。

フェイトは片方の膝を抱えて、空の街に視線を落とした。アルフがもの珍しげに首を左右に動かしているのがおかしくて、少しだけ頬が緩む。

これから行くその世界では、管理局に見つかる前に素早くジュエルシードを集めなければならない。管理局に見つかれば、ただでは済まないだろう。ジュエルシードのような危険度の高いロストロギアを個人で持つことも、管理外世界で魔法を使うことも犯罪になると知っている。

でも、管理外世界だからこそ、誰とも争わずに回収を済ませることができる可能性が高い。実戦経験もない自分が遠隔地で単独で行動するに当たって、おそらくそれだけが有利な点だろう。

だけでもし、誰か他に魔導師がいたら。

きつとそのときには、その人と戦わなければならないのだろう。

リニスがくれたもので。アルフと一緒に。

フェイトは自分の手を一瞥した。黒い手袋に包まれた手は、淡い残照に色づけられて青い。手だけでは、目の前の景色も何もかも紫の中に潜んでいた目の色は消え、夜に溶け始めていた。誰もいない、自分とアルフしかない街は音もなく夜という水の中に沈んでいく。

結界魔法を試してみる前、ここには数え切れないくらいの人たちが歩いてきた。しゃべって、笑って、ティッシュやちらしを配って。判別のつかない声や音がうねるように耳に響いてきた。そのとき初めて、自分が何年もの間、アルフと自分の声以外ともに聞いたことが無かったのに気づいた。

自分の中の、狭い世界。知っているのは、三人だけ。自分に微笑んでくれたのは、二人だけ。

微笑んでほしいのは、一人だけ。

あんなにたくさんの人が居ても、どんなにたくさんの人とすれ違っても、微笑んでほしいのは一人しか居ない。これから、ジュエルシードを求めて、誰かとすれ違っても、争っても、それは変わらない。

ここには、アルフと自分の二人だけ。

フェイトは信号機の上に立ち上がると、手を握り締めた。その唇が、音もなく言葉を紡ぐ。

アルフが振り仰ぐ気配だけがした。それに気づくと、フェイトはアルフに向かって言った。

「行こうか、アルフ。」

空に、一つ星がもう輝きだしていた。空で一等最初に輝きだす、眩しい星。名前は知らない。違う世界だから。でも、アルトセイムの山並みからも、同じように西の空、一つ輝く星があった。太陽の傍を回っているから、明るくて、そして一番最初に光ると、リニスが教えてくれた。

金のように光る、だから、金星。

ここでも、金星と呼ばれているんだろうか。

金色、私の色。

たった一つきりで光る、寂しい星。

「よし、じゃあ、さっさと済ませちゃおうね、フェイト。」

アルフの快活な声が聞こえた。フェイトはアルフを見下ろし、笑う。

「そうだね、母さんが待ってる。」

あの星は、私じゃないよ。

ソファの上で、クッションを抱きしめたなのは嬉々として身を乗り出した。

「でもでも、三年生になっても同じクラスでよかったよね！

クラス替えのとき、私、すつこくどきどきしちゃった。」

「すがすが、私もだよ、と頷いて破顔する。

「みんなばらばらになっちゃったら寂しいな、

ってクラス替えの掲示見るまで心臓止まっちゃいそうだったよ。」

頬を少し染めて微笑む。なのはがそうだよねそうだよね、としきりに頷くと、ツイーンに結わえた髪の毛がびよこびよこ揺れた。

「アリサちゃんはその時、ゼーんぜん気にしてないって言ってたけど、絶対、一番気にしてたよね。

掲示見るととき、すつこく怖い顔してたもん。」

アリサ・バニングス。名前の順でほぼ一番になるアリサは掲示板でやはり、三人のうちで一番に自分の名前を見つけた。その後、なのはとすがすがが各々自分の名前を、アリサと同じクラスの名簿に見つけるまでの短い時間で見せた表情を、すずかも覚えていた。

「うん。

アリサちゃん、自分だけ違うクラスだったらどうしようって顔してたね。」

あのときのアリサの表情を思い出しているのか、すずかの口元がわずかに綻ぶ。同じクラスだってわかっただけには、いつもの調子でまた同じクラスなのね、よろしく、なんて言ったことが余計に可笑しい。

「やっぱり、ずすかちゃんもそう思うよね！」

なのはがうれしそうに言うが同意する。

「アリサちゃんはそういうところがかわいいよね。」

「遅くなったから、家まで送っていくわよ。」

そのとき丁度、アリサが部屋のドアを開けて室内に入ってきた。まさにという良いタイミングに、なのはとずすかが同時に笑い声を上げる。自分の顔を見るなり突然笑い出した二人に、アリサが怒り出す。

「ちよつとアンタ達！」

人の顔を見て笑い出すってどういうことなのよ！」

大股でアリサが二人の座るソファに一直線に向かってくるけれど、二人の笑いは止まらない。なのはが笑い混じりに弁明する。

「だって、だってね！」

アリサちゃんが入ってくるタイミングいいんだもん！」

「はあ？」と眉を吊り上げるアリサに、ずすかが口元に手を当てたままなのはを援護する。

「今、アリサちゃんの話をしてたところなんだよね、なのはちゃん。」

アリサちゃんと友達でよかったね、って。」

なのはが首を思いつきり上下に振って頷いた。アリサが顔を引き攣らせるけれど、その頬は微かに赤い。氣勢を削がれて、アリサはすぐ脇の椅子の上にあつたずすかのカバンを持ち上げた。

「まあ、なんかよく判らないけど、いいわ。」

鮫島に車回してもらうから、アンタ達、さっさと荷物まとめなさい。

もう6時半なんのよ。」

「すずかのカバンを手渡しながら、アリサが二人を促す。

「わあ、ありがとう！」

「なのはがうれしそうに声をあげ、ソファから勢いよく立ち上がった。その拍子に、運動音痴のためか軽くつんのめる。時計の針と窓の外を見比べていたアリサが、相変わらずと呆れた顔でなのはを振り返った。「なにやっつてんのよ、アンタは。」

「つんのめつたなのはの手を引くアリサに、すずかも礼を告げる。

「ありがとう、アリサちゃん。」

「助け起こしたなのはから、きらきらした眼差しが注がれる。アリサはふん、と鼻を一つ鳴らすと不機嫌そうに答えた。

「当たり前でしょ。」

「暗くなる前に帰さないと、アンタ達じゃ心配だわ。」

「言い放つた言葉の響きのつつけんどんな様子が可笑しくて、なのはとすずかは顔を見合わせて微笑みあつた。なのははカバンを勢いよく肩にひっかけると、アリサの左肩にぶつかりに行く。

「どーん！」

「ショルダータックルをかまして、なのはがはしゃいだ声を上げる。いきなり押されたアリサが目丸くしてたたらを踏んだ。

「ちよつと、なのはなによ。」

「迷惑そうに文句をつけたアリサ越しに、なのははすずかを振り向いた。弾んだ声が跳ねる。

「アリサちゃんってやさしいよね、すずかちゃん！」

「途端顔を赤らめたアリサが何か言い返すより早く、すずかがアリサの右肩にぶつかりにいった。鈴の鳴

るような声が笑う。

「どーん！」

二人でアリサをサンドイッチにして、すずかが笑顔でなのはを振り返った。

「うん、やさしいよね。」

「ねー！」

アリサを挟んで二人が互いの顔を見合わせる。そうすると耳まで真っ赤にしたアリサが、

「ば、バカなこと言つてないで、さっさと用意しなさいよね！」
と怒鳴った。

「外はまだ冷えるね。」

玄関から外に出ると、すずかが服の袖口を押さえながらそう零した。

春先といえど、6時半過ぎの空は薄暗くなり始めている。木々の影になって見えないが、多分太陽はもう沈んでいるのだろう。空は西の端だけ赤く燃えていて、でも見上げた頭上の空はそれと対比をなすように澄んだ紺碧の空気を広げていた。夜になろうとしている。真っ暗になるまで、もう、そう時間はないだろう。

「風邪引かないようにしなさいよ。」

いくら体育が得意だからって、体の頑丈さとはまだ別なんだから。」

アリサがすずかの隣に並び、小難しい顔で釘を刺す。学校帰りに遊びに寄ったから、三人とも制服姿で、取り立ててすずかだけが薄着というわけではない。すずかがほのかに目を細めた。

「うん、ありがとう、アリサちゃん。」

その言葉に、アリサが口の中で何事か呟きながら顔を背けた。鮫島が運転してくる筈の車はまだ、エンジン音すら聞こえて来ない。アリサは初めて広い家に不便を感じ、スライドする視線はなのはを映した。なのはは西の空を見上げていた。空の縁を染め上げる夕日の名残、夜に沈んでいこうとするほやけた家々のシルエットを越えてさらに上、青い空を仰いでいた。

「なのは？」

アリサが声をかけると、なのはが肩越しに振り返った。そして、左手の人差し指を、ぴっと見上げた空に向けた。

「ほら、あれ！」

あの星だけ、びかびか光ってるでしょ！」

なのはが指差した先を、アリサとすずかは覗き込んだ。夜に濡れるその狭間、まだ光を残した空に一つだけ、明るく瞬く星が一つあった。なのはは二人の顔を交互に見ながら、声を弾ませる。

「ね、あの星、一番星だよね！」

他にまだ、星出てないもんね。」

アリサとすずかは言われて、空をぐるりと見渡した。頭上は星のある空に比べて暗く、振り返った東の空にはもう夜が立っていた。でも、そのどちらにもまだ、星は一つも見えなかった。

「一番星って、綺麗なんだね！」

やっぱり、一番きらきら光って綺麗だから、一番最初に見えるのかな！」

なのはのその言葉に、アリサの頭の中を流れたのは、あの聞きなれた歌だった。きらきら光る、夜空の星よ。でも、あの歌のどこにも、一番星が一番きらきら光ってるだなんてない。けれど、どうなんだろう、確かにあの一番星が、一番綺麗な気がする。夜空の一番最初だからそう思えるだけなのか、アリサにはわ

からない。でも、なのはの言うことはたまに的を得ているから、案外あっている気もした。

「あれ、なんていう星なんだろうね。」

「すずかが首を傾げる。なのはは腕を組んで頭を捻る。

「うーん、なんだろう。」

アリサもあの星の名前を知らなかった。学校の授業での成績は良いけれど、星についてなんてほとんど知らない。太陽が東から昇って西に沈むくらいは知っているし、太陽系の惑星の名前くらいは言えるけれど。実際に星を指差して、あれの名前は、なんてわからなかった。

「アリサちゃんも知らない？」

「すずかが黙っているアリサにも尋ねた。アリサは素直に、わからないわ、と肯く。

「アリサちゃんにもわからないんだ。」

「じゃあ、なのはが名前をつけちゃえばいいってことかな？」

何故その結論に達するの、とアリサが呟くより早く、なのははアリサとすずかの二人に方へ身を翻した。西の空を背景に、白い制服が靡く。星の下、なのはが指を天に掲げた。

「金星！」

「金びかだから、びったりだよね？」

金星という名前の惑星がすでにこの世には存在する、ということを多分なのはは知らなくて。あれが世に言う金星ではなかったら、金星が二つ出来たことになってしまうのだけだ。

「うん、びったりじゃないかな。」

「覚えやすいし、きらきら光ってる星があったら必ずそうだってわかるもんね。」

「すずかもびったりと言っていることだし、良いかな、とアリサは思った。なのははたまに的を得たこと

を言う。きつと今日もそんな感じなんだろう。

「よろしくね！ 金星さん！

なのはだよー！」

でも、思いつきり星に向かつて手を振られるのは、同級生ながら恥ずかしい気がした。鮫島の運転する車が角を曲がつて姿を現す。今日はもうさよならだけど、明日の朝には必ず会う。

「ほら、車が来たから、行くわよ。」

まだ寒いんだから、なのは、アンタも風邪引くんじゃないわよ。」

風邪を引いて休まない限りは、なのはが頷いて、アリスの元に駆けてきた。

「うん！」

アリスちゃんはやさしいね！

もし、三年生で違うクラスになっちゃってても、

なのは、アリスちゃんとすずかちゃんのところには必ず一緒にお昼食べに行つてたよ。」

「またもやシヨルダータツクルをかましてくるのはを、今度は受け止めたアリスが何の話よ、と肩を落とした。」

プリン

ドアに据え付けられたベルが鳴り、来客を知らせた。お昼の客も引いて、店内が落ち着きを取り戻してきた頃合。高町桃子は余裕のある表情でそちらを振り返る。

「いらつしやいませ！」

ドアのところ、しとやかな居住まいで佇む女性は、数ヶ月前に海鳴市に越してきた人だった。彼女は柔らかな笑みを浮かべ、親しげに桃子に話しかける。

「こんにちは。」

ケーキを頂けるかしら。」

午後の日差しの中でも艶やかな、印象的な髪色をしている彼女はもちろん外国人で、名前をリンディ・ハラオウンという。桃子の娘であるなはがこここのところべったりな女の子の身元引受人でもあり、大の甘い物好きを自負するリンディは、ここ翠屋を折に触れ訪ねてくる。

「リンディさん、こんにちは。」

どれでも、好きなものを選んで行ってくださいね。」

リンディはうれしそうに表情を綻ばせると、おだやかな足取りでガラスケースの前に立った。翡翠の様な瞳に色とりどりのケーキを映す。

「先週から、新しいケーキを出したんですよ。いい苺が入荷出来るようになったので。」

こちらのショートケーキなんですけど。」

桃子がそう言いながら指したのは、ガラスケース上段の中央、一番良い位置に置かれたショートケーキ

だった。粒が大きく鮮やかな色をした苺が乗っているショートケーキは、スポンジの間の苺も目を引き、他のものよりも一回り大きかった。

「あら、おいしそう。」

フェイトはこっちの方が喜ぶかしら。」

右手を頬に当て、リンディは考え込む。毎度、お昼の客が引いた頃合に来て、存分に悩んでからケーキを買っていく彼女の姿は、眺めているだけで何故だか自然と頬が緩む。

「おかあさん、ただいまー！」

そのとき、店の裏、家の方から元気な声が響いてきた。軽い足音と高い声は、高町家の末娘のものだ。桃子は背後にある家へと続く扉を覗き込んで、娘の帰宅を迎える。

「なのは、お帰りなさい。」

学校、どうだった？」

しかし、桃子の言葉に返事として飛んできたのは、なのはが二階への階段を駆け上がる音だった。転がり落ちているのではないか、という位の音がドアの奥から響いてきて、桃子は顔をしかめた。

「ごめんなさいね、うちの子つたら騒がしくて。」

申し訳なきそうにリンディに頭を下げるが、リンディは可笑しそうに目を細めるだけだった。その間にも、なのはが立てることながたんという物音が聞こえてくる。一体、あの子は何をやっているのか、そろそろ注意しないと、等と思っているうちに、今度は階段が壊れているのかと錯覚するくらいに騒がしく一階に下りてきた。家中を走り回る足音は、どんどん近づいてきて。

「おかあさん！」

プリンちようだい！」

「はっ、とドアの内側からなのはが顔を覗かせた。帰宅の挨拶も早々にそんなことを言うのはは、目をきらきらさせて桃子を見上げた。」

「こらなのは、家の中を走り回るんじゃないません。」

いくらわが子が可愛いとは言え、母親たるもの輝く瞳に流されてはいけなときだつてある。本人が思っているよりも素直なのはの表情は、プリンを貰うどころか小言を貰つてしまったことにちよつと不満を滲ませた。それでも一応控えめな音量で、「はーい。」と返事をしたから良しとして、桃子は一步引いて来客を告げた。

「それと、リンデイさんがいらつしゃつてるんだから、先に挨拶すること。」

なのはが桃子の後ろ、ガラスケースの反対側に立つリンデイを振り仰ぐ。表情を解いて、なのははリンデイに挨拶をする。

「リンデイさん、こんにちは！」

どれでも好きなものを選んでいってください。

一番上のケーキがおすすめですよ、すつこくおいしいですから！」

なのはは頼んでもいないのにケーキの紹介まで行くと、弾かれたように桃子を見上げた。

「ね、ね、おかあさん。」

プリン貰つていいでしょ？」

ちよつとだけだから、お願い、となのはは桃子に手を合せた。声も眼差しも仕草も甘えている。普段は頑固で意地っ張りなところがあつてという風なのに、こういう態度のうまさは未娘だと桃子はしみじみ思う。いつの間にか私服に着替えているのはは、プリンを持って出かける気満々のだろう。早く出かけたくつて、足がそわそわしている。

「んー、そうねえ。」

「じゃあ、今日帰ったら、お風呂掃除してくれる？」

もったいぶる口調でちら、となのはを見ると、なのははこくこくと頷いた。

「うん、お風呂掃除なのはがするから！」

「いいよね？」

首を傾げると、ツインテールがひよこんと揺れた。お気に入りの黒いリボンの上を光が滑る。ねだつてくるなのはの目の輝きが期待を増す度にどんどんきらきらしだすから、桃子はもう少し焦らしてみろ。

「うーん、どうしようかなー。」

待ちきれないといった様子でなのはが足をとたとた踏み鳴らす。「おかあさーん。」と拗ねそうな声を出しながらも気を揉んでいるのをじっと見つめると、なのははびたつと動きを止めた。息を吞んで見詰め合うこと数秒。桃子はぱつと顔を明るくした。

「よろしい！」

途端、なのはが満面の笑みを咲き誇らせて、カウンターの中に飛び込んだ。

「お母さん、ありがとう！」

言うなりなのはは、慣れた手つきで折りたたみ式の紙の箱を組み立てると、ガラスケースをからからと開けた。プリンなのははから見えて一番左奥の下段に置いてある。なのはは柔らかい頬をさらに溶かしながら、プリンを一つ手にとって箱に入れた。

「また、アリサちゃん達と遊んでくるのね。」

桃子が尋ねる中、なのははプリンの二個目を箱に入れた。そして、それだけで箱を閉じ始める。

「違うよ。」

今日は、アリサちゃん達とじゃないよ。」

なのははプリンを二つ詰めただけの箱を大事そうに抱えると、ガラスケースを閉じた。

「それじゃあ、誰と遊んでくるの？」

なのははプラスチックのスプーンを二つ手にすると、ちよつとだけ開いた箱の隙間から中に入れ、翠屋のシールを貼って封をする。それから桃子の脇をすり抜けて、背中を向けたまま返事をした。

「秘密——」

じゃあ、遊びに行つてきまーす！」

あ、なのは！ と桃子の声が追いかけるが、それに捕まることなく、なのははプリンを抱えて走り去つた。足音は玄関の方へ向かい、程なく扉が開閉されるのが聞こえた。

「ふふ、なのはさんったら、元気ですね。」

今のやりとりを見ていたリンデイが、娘にまんまと逃げられた桃子に言葉を掛けた。

「近頃、ひみつー、が多いんですね、なのはったら。」

誰と何してるのかしら。」

そう言つて首を傾げ、桃子はリンデイに向き直る。疑問の割りに、口元は笑みを生んでいた。

「フエイトも近頃よく、ひみつ、なんて言つて出かけるんですよ。」

アリサさん達と？ つて尋ねると、違うつて言つて。」

桃子とリンデイは顔を見合わせると笑い出した。

「ところで、フエイトちゃんとは、もう？」

ひとしきり笑つたところで、桃子が口を開いた。砕けていたリンデイの唇に筋が通り、彼女は頷いた。
「ええ、一昨日。」

細められていた眼差しが開き、桃子の姿を内に留める。桃子はリンディを見返した。

「それで、今日はケーキですか？」

リンディは首を振った。

「いえ、今日はフェイトが、初めて国語で100点を取ったので、そのお祝いです。」

甘やかしてますねー、と言って桃子が笑う。リンディもそれには頷いた。男の子より、女の子の方が可愛がるかいがあるわ、なんて付け足して。

それから、桃子がリンディを見つめて口を開いた。

「うまく行くといいですね。」

桃子となのはは親子だ。リンディは片手にケーキを取るためのトングを持ったパティシエの姿に、何にも怯まず立ち向かうのはを見た。午後の落ち着いた喫茶店、お客さん達の話し声が満ちる中、目を楽しませるようなケーキが並ぶ中に立っている彼女に、一条の杖を持ち自らの意志を貫く幼い少女の姿が重なる。

リンディは肯いた。

「ええ。」

例え何年掛かっても、100点を取りたいと思っっています。」

なのははプリンの箱を抱えて、坂道を駆け上がる。右手の方はガードレールがあつて、その下は舗装された小さな崖だ。さらに向こうには沢山の家の屋根があり、もつと先には街並みが一望できた。今日の天気は飛びつきりに良い。真つ白い雲がいくつも流れていて、青空に眩しいくらいだ。なのははさらに足を速めて駆け上がる。持久走の時は苦しいだけなのに、今、弾んでいく息は歌っているみたいに楽しいリズムに聞こえるから不思議だ。あの角まで追いかけてこね、なんて足元を走る自分の影に勝負を仕掛ける。大丈夫、影は斜め後ろに伸びているから、絶対に負けない。足の裏の到着時刻は一緒だけどね！ なんて心の中で言つた言葉に笑いがこみ上げる。

なのはは坂道を登りきつて角を左に曲がつて、今度はなだらかにカーブする道を駆け抜ける。車はほとんど走っていない住宅街、綺麗な花壇を作っている洋風の家の前を走りぬけ、青々と生い茂つた木の陰を通つてもつと先へと走つていく。あとちょっと。次の角の左側にある公園を抜けたところが待ち合わせ場所。

公園の入り口に並んだ三つの黄色いハードルみたいな車除けを、なのはは飛び越えるでなく擦り抜けた。他の子だったら飛び越えるつてわかっているけれど、一度転びそうになつたことがあるし、万一転んだらプリンが台無しだ。急いでいたつて危ない橋は渡らない。なのはは小学四年生になつたばかりだけど、ちゃんと急がば回れという言葉は知っているもん、と頭に浮かんだクラスメイト達に言い放つ。

公園はつつじの植木と桜の木に囲まれている。生まれたばかりの桜の木の若葉が光に透けているみたいだつた。さつきよりもつと息があがつているのに、なのはの足取りはもつと軽くなる。鉄棒とジャングルジムとブランコと、いろんなものがぐるぐるつと囲むように並んでいて、真ん中はボール遊びだつて出来るくらいに広い。実際、今も小学校低学年の男の子達がドッチボールをして遊んでいた。ドッチボール、当てるのも逃げるのもなのはは苦手だけれど、当たる才能だけは天下一品だ。みんなもつと手加減して投げて

欲しいけど。前からずっと、いつも一番に狙われるのはなのはだった。でも、最近は違う。

なのはは公園を突っ切ると、柵にぐるっと囲まれた鉄塔の外周に足を踏み入れた。緑の金網に囲まれた鉄塔の足元にはねこじやらしとか、芯を抜くと笛になる笹っぽいような稲っぽいような草がぼうぼうに生えているけれど、なのはが歩いている外側はコンクリートだから金網を越えて伸びている草が足をくすぐってくる程度だった。コンクリートの幅はなのはが足をぶらさげて座って丁度良いくらい。ただ、あんまり見下ろすと、急な斜面を板チョコみたいな形のコンクリートが覆っていて滑り落ちるといふか転がり落ちるしかなさそうだから、なるべく前を見て歩く。このときばかりはプリンは片手で、もう片方はしっかりと金網を握る。

ぎしぎしいう金網に不安を抱きながら、なのははようやく鉄塔を回りこんだ。

そこには、足を宙に投げ出して座る、金髪の少女の姿があった。

「フェイトちゃん、お待たせ！」

なのはが呼ぶと、フェイトが勢いよく立ち上がった。

「なのは！」

フェイトは危なげない足取りでまっすぐなのはの元に駆け寄ると、金網を掴んでいたなのはの手を取った。なのはが頬を染める。

「にやはは、フェイトちゃん。」

「じゃじゃーん！」

効果音を唇で奏でると、なのはは下げていたプリンの箱をフェイトの目の前に翳した。白い箱がいつもより輝いて見えるのはきつと気のせいじゃない。折り目も完璧だ。フェイトが目を丸くして、なのはを覗き込む。

「え、なのはこれ。」

なのはは自慢げに胸を張って、フェイトにそれを手渡した。

「さて、この中身はなんでしょー。」

フェイトが眉毛を垂らした。

「え、ええつと・・・。」

なのはのお店、いっぱいケーキあるからわかんないよ。」

困り果てた犬のように肩を落とすフェイトに対して、なのはは上機嫌に首を左右に振る。期待の溢れた瞳は、フェイトの答えを待ちわびている。フェイトは唇を結ぶと、うーん、と唸りだした。

「なのはが好きなのは、ショートケーキだけだ。」

でも、お皿とかないと食べにくいから、違うかな。」

お皿がなくつても食べやすいものだ、プリンとかシュークリームとか。」

プリン、とフェイトの口から出たとき、なのはは思わず声をあげてしまいそうだったけれど、どうにかこうにか飲み込んだ。一瞬変な表情になった気はするけれど、悩みだしたフェイトは見えないから大丈夫。なのははうーん、と首を縦に動かしながらフェイトの推理に耳を傾ける。

「プリンかシュークリーム、か。」

でも、シュークリームにしては重いかなあ。」

フェイトは箱を持ち上げて、底を覗き込んだ。ちよつと面白い顔になっているフェイトをなのはは見つめる。色白な方だと言われる自分よりも白い肌は少しピンク色っぽくて、赤い瞳は差し込んでくる光を取り込んでガラス玉みたいにきらきらしている。これは最近気づいたことだけれど、フェイトは睫毛まで金色で、それが光と編み上げる陰影はいつ見ても飽きない。

「あ、でも、新しいショートケーキを出したってなのは言ってたから、それかな。他のケーキよりも大きいって言ってたし。」

「フェイトはうん、と大きく頷くと、箱をしつかりと持って、なのはに見せた。」

「これの中身は、新作のショートケーキ！」

威風堂々言い放ったフェイトと、出題者のなのはの視線が真つ向からかち合う。なのはの眼差しが無言のうちに、ふあいなるあんさー？ と問いかける。フェイトも無言で答える。ファイナルアンサー。

なのはが唇を突き出した。

「ぶつぶー！」

「はずれでーす！」

フェイトががつくりと項垂れると、なのははぼんぼんとその肩を叩いた。

「フェイトちゃんおっしーい！」

あとちよつとだつたんだけどな。

開けてみていいよ。」

なのはに促され、フェイトは片手で箱を抱え込み、もう片方の手で器用に箱に封をするシールを剥がす。何処も破けることなく剥がされた翠屋の楕円形のシールは少し反り返って、吹いてくる風にひらひら揺れた。フェイトが中身を落とさないように慎重に箱を開き、中を覗き込んだ。

「わあ、プリンだ！」

ガラスの容器に収まった焼きプリンが二つ、礼儀正しく並んでいた。忘れられることなくプラスチックのスプーンも一緒に入れられている。

「一緒に食べたいなあ、って思ってた。」

ここで食べたなら、なんかいつもよりおいしく思えそうだし、ね？」

公園を抜けて、鉄塔の立つコンクリートの台座の縁は、街並みから一步外に飛び出している。足元には沢山の家の屋根が織り成す街の景色がずっと先まで広がっていて。そして、ここからだとはつきりと見える、一番遠くにあるものは、海だ。

水平線が青く広がっているのが見える。

二人で見つけたとっておきの場所。二人だけの秘密基地。

「うん、きつと、すつごくおいしいと思うよ。」

花が開くように、フェイトが微笑みを舞い上がらせた。

ひとひら

窓の外には、飛行機雲が伸びていた。なのは握っていたシャーペンをノートに転がし、頬杖をつく。午後の最初の授業。一番眠い時間帯。光を乱反射するノートの繊細なおうとつすら質感を伴って目に焼きつき、紙に引かれた黒鉛の文字が浮き上がる。国語の教科書、純文学の字の連なりは遠い。黒板の前に立つ教師の声は、静寂と物音に紛れる。

なのはの意識は淡い光の表面に漂った。

目蓋を透かす日差しに、視野は橙赤色をして。そこにぼつぼつと、距離感と共に音が滑り込んでくる。隣の席の子が椅子を引く。ずつと右奥の方、廊下側の席からはシャーペンが机の上で転がった。教科書を捲ると、ノートを捲る音は違う。黒板を引つ掻く白墨のリズムが、教室を走る。そのとき、後ろの席で身じろぎのような音が聞こえた。

なのはのすぐ左隣、耳元でからからと音を立て、窓が開く。

窓から、少し涼しい風が流れ込んで来た。柔らかな風はなのはの頬を撫で、体に纏わりついた空気を押し流し、教室の中にまで舞い込んだ。なのはの髪が、頬をくすぐる。

後ろの席の子が、席に座り直した。なのは静かに目を開けた。僅かな間、閉じていただけなのにノートが眩しくて、目を数度瞬く。見えてきたのは、先ほどと同じ、浮き上がった黒鉛の文字と、紙面の陰影。なのは椅子を僅かに後ろにずらすと、背もたれに寄りかかった。後ろに座る子が、なのはが椅子の脇に垂らした右手に触れた。なのはが後ろの子の人差し指と中指を掴むと、その子は親指をなのはに絡めた。窓の外、薄青い空には飛行機雲が線を引いていた。

窓の中、映りこんでいるのは、後ろの席の女の子の、柔らかな微笑みだった。
声に出さず、なのは彼女の名前を呼ぶ。絡んだ指先はほのかな熱をもつて熱い。

季節はもう、秋も終わりを迎えようとしていた。この時期らしく高くまで晴れ上がった空の高さに、うろこ雲の連なりが映える。河のように流れる薄い雲は遠く手を伸ばしても決して届くことはなく、その高みから舞い降りてきたような涼やかな風がなのはの頬を、手足を撫でた。放課後、学校に残ることなく出てきたとはいえ、昼も過ぎると少し肌寒さを感じ始める頃。なのはは冷えた指先を握りこんで道の両端を見渡した。

大通りから一步入ったところ、車通りもほとんどない道は中学生の通学路となっていた。なのはの立つ道の向かい側には、民家の塀と電柱と家庭菜園らしき小さな畑が並んでいて、時折猫が我が物顔で通っていく。見上げれば、電線には数羽のすずめが止まっていて、夢中でおしゃべりをしていた。

なのはが背を預ける塀には、裏側に生える大きな木が濃い緑の葉を広げていて、揺れるたびに木漏れ日と葉音の霧雨を降らせる。この塀は確か小さなお寺のものだったということを思い出しながら、なのははロープアーに掛かる日差しや欠片と戯れる。滑らかな皮靴の表面に、真っ白く光が溜まっていた。目にはとても眩しいのに、靴が焼け付くことないひかりは、足の角度を変えると自由に動き回る。

「青まきがみ、黄まきまき、赤まきまがみ！」

威勢のいい男のこの声が右の方から飛んできた。なのはが顔を上げると、そこには数人の小学生がランドセルを背負って歩いてきた。カバンの端からリコーダーが突き出している男の子が、黄色い通学帽を逆向きに被った子を指差す。

「まきまきってなっぺんじゃん！」

「言えてねーよ！」

指差された子は、口を大きく開けると、それに見合った大声で言い返す。

「じゃあ、お前言ってみろよー！」

「青まきがみ、赤がみつっ！」

「言えてねえー！」

やっばりお前も駄目じゃんかだせえ、じゃあ俺が、という声がいくつも重なりながら、足音も騒がしくなのはの前を通り過ぎ、小学生達はぼたぼたと帰っていく。

なのははその後姿も音も遠くなると、ふっ、とため息を吐いた。

「フェイトちゃんもはやてちゃんも、遅いなあ。」

ブレザーのポケットに入れた携帯電話を取り出して時刻を確認すると、二人を待ち始めてそろそろ10分なろうとしていた。

今日は一緒に寄り道をしながら帰ろう、と約束していた。学校で待ち合わせてもよかったのだけれど、なんとなく思い立って下校途中の道すがらで、ということになって、場所に選ばれたのは何処に寄り道するにも都合が良い、帰り道の中間地点、お寺さんのお隣。

放課後、まっすぐに出てきてしまったのが不味かったのだろうか、なんてなのはは振り返る。久しぶりに二人と出かけるとなると、なんだか妙に浮き足立ってしまったって、クラスメイトに話しかけられたのも早々に中座して学校を飛び出したら、こんな有り様だ。もともとこちらの方面に帰る生徒は少ないために、あまり衆目に晒されては居ないけれど、これが学校の目の前だったら居た堪れなくて辛かったかもしれない。

それでもやっばり、一人でこんなところに突っ立って待っているのも暇だった。そもそも学校をすぐに

飛び出して待ち合わせようなんて言っていないから、二人が多少遅くたって仕方ないことなのだけれど。フエイトちゃん達、もう学校は出たのかな。

なのはカバンを後ろ手に持ち替えると、頭上を仰いだ。そういえば、学校を出てくるときに、二人のクラスのホームルームが終わっているかどうかも確認しなかった。少しでも早く待ち合わせに行つて、少しでも早くみんなで会えれば、それだけ長く一緒にいられるから。そう思うと、急がないではいられなくつて。学校を出てからも、随分と早足で歩いてきた。それを考えると、もうしばらく待たなければならぬだろうか。

なのはの脳裏にフエイトとはやてが過ぎつた。二人は今、同じクラスだからきつと一緒に並んでくるのだらう。二人で談笑しあいながら、のんきに歩いて来るんだらうな、と思えるし、当然そうだらうとも思う。

携帯電話の画面を開く。待ち始めて丁度、10分だった。

不意に、頭上の木が大きくしなり、葉が煩くざわめきだした。特に強い風が吹き出したわけではなく、この木だけが揺れている。猫かな、となのはが首を傾げたときだった。

フエイトがなのはの頭上を飛び越えて、塀の上から飛び出した。

「え？」

金色の髪が翻り、軽やかな足が空中に軌跡を描く。その姿を木漏れ日が彩つて舞う。瞬きの合間に、フエイトの目がなのはを捕らえた。その唇が音を紡ぐ。

「なのは！」

フエイトはなのはの前に、軽く着地を決めた。空中でも器用にスカートを押さえていたフエイトは、埃を払うようにするとすぐになのはに歩み寄つた。

「ごめん、待たせちゃったよね。」

ええつと、これには深い事情があつてね。」

驚きから立ち直れず何も言えないのは向かつて、怒つていと思つたのかフェイトはしどろもどろにあれこれ言い募ろうともがく。

「えーつと、私がね、早く行こうつてはやてを引つ張つて走り出して結構前についたんだけど、

はやてがこんな早く着いたつてなのはちゃんがそんな早く来るかい、何十分待つつもりやねん、

つて言つてね、ええつとね、15分くらい前に一度ついたんだけどね、

なのははすぐ来てくれるつて言つたんだけどね、

なのはちゃんのクラスはまだホームルーム終わつてなかつたつて言うからそれでね、」

慌てているフェイトの説明は、話せば話すほど意味がわからなくなつていくから不思議だ、となのははいつも思う。驚いていたのがいつの間にか、戸惑いと呆れに変わつてしまつていた。ただ、文字通りあわわしているフェイトが面白い。

「それで、はやてが来る途中に見つけたトラックを追いかけようつて言つてね、」

そこまでしゃべつて、フェイトはなのはが話しについて行けていない表情をしていることに気づいたらしく、言葉と息を一度ごっくり飲み込んで、右手に提げていた茶色の紙袋をなのはに差し出した。

「ほら、これ！」

差し出された紙袋は、何処のお店のロゴも印刷されていない、そつけないものだった。ただ、割と大きいものが入つているのか、かなり膨らんでいるし重そうだった。なのははフェイトの手からそれを受け取る。紙袋は確かに重いし、それに暖かかった。

フェイトがなのはを見つめて、満足そうに言う。

「開けてみて！」

期待に満ちた眼差しで促され、なのははカバンを代わりにフェイトに持ってもらうと、紙袋を開いた。その中には、あかむらさきの芋が三本入っていた。

「あ、やきいもだ。」

思わずそう零すと、フェイトが大きく頷いた。

「うん！」

なのはと一緒に食べたいな、って思ってた。

今年、全然食べてないって前に言ってたしね。

途中で見かけたトラックを追いかけてたら、ちよつと時間が掛かりすぎちゃって、

なのはのこと待たせちゃったけど。」

言葉尻を濁しながら、フェイトがなのはを窺うように見つめた。なのはは紙袋を抱え込むと、満面の笑みと共に頷いた。

「ありがとう、フェイトちゃん。」

フェイトがうれしそうに頷き返した。少し冷えていた指先は、紙袋から伝わってくる熱であつたかい。

やきいもと一緒に食べたらかきつと、体の中からあつたまるだるうな、となのはは想像した。やきいもを齧りながら歩くなんて、ちよつと恥ずかしい気もするけれど、そんな気分を味わうのもたまには良いと思える。

地面からちよつと浮いてるみたいな感覚、うれしくてどきどきする瞬間。胸が熱いのはやきいもの熱じやないって知ってる。

「フェイトちゃん。」

名前を呼ぶと、フェイトが微笑んでなのは見つめた。

「なあに、なのは。」

答えるフェイトの手が、なのはの肩に触れた。少し開き始めた身長差。フェイトの頬が、なのはの耳に当たると、

「こら！」

そののばかつぶる！ ていうか主に金色いの！

カバンは先に塀の反対側に投げろっついても言うてるやないか！」

突然頭上から降ってきた声に、弾かれたよう二人が顔を上げると、そこには塀の反対側から上半身を覗かせるはやての姿があつた。

「あ、そういえば、なに、二人ともお寺突っ切つて来たの？」

ばち当たるよー、そういうことばっかりしてると。」

なのはが二人を交互に見ると、フェイトが肩を小さくした。

「結構大回りしちゃったから、近道しないとなのはをすっこく待たせちゃうかも知れないって、つ」

言い終える前に、はやてが塀の反対側から無情にもカバンを投げ捨ててよこした。

「ああ！」

フェイトの悲鳴が上がる。どうやらぶん投げられたのはフェイトのカバンだったらしい。春から大切に使っていたカバンがアスファルトの上で無情に跳ねる。

「カバンは二つ同時には持って行かれへんのですー。」

はやてがそう言いながら、自分のカバンを抱えて塀を飛び越えて来た。すどんと、危なげなく着地すると、はやてはにこつと笑った。

「さ、やきいも食べながら行こっか。」

雨の終わり

「ねえ、フェイトちゃん。」

呼びかけたなのは声は、雨音の中で澄んで響いた。

フェイトはその音色に引かれるよう、隣を振り返る

「どうかした？」

12月の寒い空気の中、なのはの口元から白く息が広がって散っていく。

雨音と共に、絡まるように。

「雨が降り始めたなー、っていうのは見たことあるけど、

雨が止んだ、って瞬間って、

あんまり見たことないよね、って思ってる。」

雨宿りをする屋根の下、蛍光灯の光が照らす先は真っ黒な夜が満ちている。雨の雫は目を凝らしても闇に飲まれて見えず、間断なく降り注ぐ雨の柔らかな気配だけが、その存在を肌で伝えていた。地表を、屋根を、道路を、草木を、撫でるように降る雨。フェイトはマフラーに顔の半ばまでを埋めながら、なのはの言葉を反芻する。

「そうかも知れないね。」

雨って、気づくとほつ、ほつって、途切れてるもんね。」

そこまで言うからフェイトは、でもね、と切り返した。マフラーの中で顔を微笑ませる。

「私、雨の終わる場所、見たことあるよ。」

得意げなフェイトの眼差しがなのはを映して輝いた。

「雨の終わる場所？」

なのはが首を傾げると、フェイトは頷いて、屋根の端にある一本の錆びた鉄の柱に身を預けた。なのはに横顔を向け、黒い空を仰ぐ。

「うん。」

結構前なだけどね、雨の中を一人で飛んでたんだ。

下は森で、遠くに海岸線が見えて。

晴れてたら綺麗なだけど、すつこく寒くて急いでたんだ。」

思い出しながら話すフェイトの言葉は少しだどたどしい。でも蛍光灯の明かりを受ける横顔は澄んでいた。息を吸い込むと雨の匂いがある。なのはは黙って、フェイトの言葉に耳を傾ける。

「でもね、突然雨が止んだんだ。」

いきなり周りが眩しくなつて、見上げたら雲も白くて、

でも雨水でなんかすつこく景色がきらきらしてたよ。

振り返つてみたらね、すぐ後ろはまだ暗くて曇り空で、雨が降っていた。

それから雨が止んでる空を見上げたら、真つ白い雲の隙間から、お日様が見えたんだ。」

そう語るフェイトの瞳には、その日の青空が輝いている。

なのは小さく頷いて、目を閉じた。そうして、目蓋の裏に雨の終わりを通り抜けたフェイトを思い描

く。曇天の空の下、雨に濡れながら空を駆ける。バリアジャケットとフィールド魔法で雨を避けるけれど、

速度を出しているからフィールド魔法が結構な負荷になってしまつて面倒で、重苦しい飛行。自分の体を

打つ雨音と、耳元で裂ける風の音だけを聞いて、速く。

その体が突然、ぱつと晴れ間の中に飛び出す。

驚いて思わず空中に静止すれば、白い雲の中に眩しく光る太陽があつて。暖かさに、ちよつとずつ体が解れていく。きつと、そうだ、白い雲の間からは、光がまるで幾筋もの道のように、降り注いでいたに違いない。そして、その一つがフェイトを迎えていたんだ。

なのはは顔を上げ、フェイトを見上げた。

「すつごく、綺麗だったんだろうね。」

フェイトが満面の笑みで答えた。

「うん、なのははにも見せたかった。」

地平線の向こうに日が沈んで、空の端にだけ光が残ると、雲は薄青いシルエツトだった。視界の先に続いていく街並みも影になっていく。その中で、灯りだした街灯や家々の居間の光、信号機の青や、店のネオンサインだけが切り離されている。未だ空気の中に満ちる、太陽の気配に飲み込まれて、薄ぼんやりとした明かりはわずかに広がるばかりで何も照らし出さない。ただ少し、目に残るだけで。

街角にほつりほつりと立つ姿に、少しの寂しさを覚えるのは何でだろう。昔、山々の合間から見下ろした光だからだろうか。それとも、アルフと二人、ビルの上から、空の上から幾度となく見つめた光だからだろうか。

今自分は、あの日見つめた光の中にいるのに。ファーストフード店の煩雑な音楽と人の声と、物音に包まれて、頭上には幾本もの蛍光灯が輝いて、夜に染まっていく空から、私たちを切り離している。地表にだけある、光に満たされた空気、空間。息をすればそれだけで、人の気配を感じ取れるほどに、人の中に居るのに、どうしてこんな気持ちになるんだろう。

なのはが、トイレに行っちゃって、二人席に一人で座ってるから寂しいだけなのかな、なんてフェイトはポテトを人差し指と親指で挟みながら思った。店は一面がガラス張りで、フェイトの座っている席は店の一番端。丁度、ガラスに背中も、肩も預けることが出来るような場所だった。ガラスはよく磨かれていたみたいで、透明に見えた。向こう側には、二枚のガラスを越して、店内の色調に合わせて黒く染められた消火栓が壁にはまっている。フェイトが寄りかかっているガラスの外側には、真っ赤なフリーペーパー置きがあった。

少しぼそぼそしたポテトを口に入れながら、フリーペーパー置きを見る。店の形状の問題で、丁度いい空間がそこに開いているということなんだろう、構造の隙間にすっぽりと収まるようにして外に置かれたそれは、濃い赤の塗装に守られて錆び一つ浮いては見えなかった。時期ではないのか、フリーペーパーもない。ただ、そこにあるだけだ。

外に置かれているのに、意外と綺麗なんだな、なんて微かに驚きながらも、置かれている足元のタイルを見ると汚れが吹き溜まって煤けている。フリーペーパー置き自体の梁にも、黒ずんだ埃が薄くではあつたがこびり付いていた。小さな綿埃が、どうにか何かに絡まって、風に吹かれてその上で震えている。

フェイトは店内に視線を戻すと、ポテトの箱に手を入れた。取り出したのは、なんだか柔らかく、へたれたポテトだった。持ち上げると半ばでうなだれるそれを齧る。他のポテトよりも一段冷たい気のあるそれを食べていると、トイレから戻って来たのは角を曲がって現れた。なのはフェイトの顔を見るなり微笑んだ。

「遅くなりましたー。」

「待ったー？」

頬を緩めながら、椅子を引くなのはに、フェイトは神妙に頷いた。

「捜索願い出そうかと思つた。」

二人は顔を見合せて、もう一回笑つた。

しゃぼん玉

「しゃぼんだーま、とんだ。

やーねーまーでー、とーんーだ。」

ヴィヴィオが外を見上げながら体を左右に揺する。開け放たれた窓からの風が白いレースのカーテンを膨らませ、ヴィヴィオの頬に触れた。

「やーねーまーでーとんで、

こーわーれーてーきーえーた。」

ヴィヴィオの目が細くなり、幼い頬の輪郭が緩む。指の短い丸い手が、カーテンの裾を掴み、逃がした。「かーぜかーぜふーくーな。

しゃぼんだーま、とばそ。」

ヴィヴィオが空を仰いだ。庭先、向かいの家の屋根との間に見える青空には、白い雲が飛んでいる。大きな真っ白い雲は、じつと見詰めている時だけ動いた。少しずつ、離れていく。

「ヴィヴィオ、歌上手だね。

誰におしえてもらったの、その歌。」

スリッパの音が近づいてきて、ヴィヴィオの隣に座った。そちらへ顔を向けると、長い金色の髪が見えた。ヴィヴィオはお姉さん座りをしていて、彼女の膝に手を置くと、自慢げな表情を見せた。

「なのはままに教えてもらったの。
フェイトままは知ってる？」

フエイトは首を左右に振った。そうして、自分の膝の上にある小さな手に、自分の手を重ねて微笑む。「うん、ちよつとだけ聞いたことはあるけど、よく知らないんだ。」

「だから、ヴィヴィオが教えてくれるかな。」

「ヴィヴィオは元氣よく肯いた。」

「うん、ヴィヴィオが教えてあげるね！」

「最初はね、」

「しゃーぼんだーま、とんだ、だよ！」

先ほどの丁寧な歌声ではなくて、少し調子を外して、でもヴィヴィオは上機嫌に大きな声で音を刻む。フエイトは指先でリズムを取って、耳に触れるヴィヴィオの声と、その歌詞を記憶の縁に描いていく。午後になったばかりの、涼しさを残した空気が流れていく。

「かーぜかーぜふーくーな。」

「しゃーぼんだーま、とばそ。」

「歌いきったヴィヴィオが口を大きく広げた。」

「フエイトまま、覚えられた？」

「フエイトはヴィヴィオの前髪を撫で上げながら、うん、と肯いた。」

「ヴィヴィオの歌が上手だったから、すぐに覚えられたよ。」

はにかんだようにヴィヴィオが唇を綻ばせた。フエイトの足を叩き、お尻をひよこひよここと浮かせながらヴィヴィオは声を弾ませた。

「じゃあじゃあ、今度は一緒に歌おう？」

「ね！」

フェイトが微笑むと、二人の唇から紡がれた歌声がリビングに満ち溢れる。それは開いた窓から外に走り出て、穏やかな風と共に駆け抜けていった。フェイトはヴィヴィオの温かな手のひらを感じながら、彼女の零す満面の笑みに微笑みを浮かべる。

台所には、この前スーパードで貰った細いストローがある。後で、石鹼でしゃぼん玉を作って、そろそろ帰ってくるのはと一緒に三人で、しゃぼん玉を飛ばそうと思った。

人影のない街の空白を映して、日の落ちた地平から吹き込んで来る風が耳を切る。宵の青と混ざり合う残照が薄くまばらな雲の中に閉じ込められていた。なのはの前髪を夜風が撫でる。その流れに浚われるよう、なのはは隣の人に眼差しを向けた。金色の髪を揺らし、目蓋を閉ざして座り込んでいる人。その横顔に差し込むあどけなさに、なのはの頬は柔らかく綻んだ。

「そんなに眠いなら、寝ていいよ。」

迎えが来るまで、あと三十分くらいあるから。」

空気に溶けるよう囁かれたなのはの声に、フェイトは前後していた頭の動きを止め、緩慢な動作で目蓋を押し上げた。そこから覗いた焦点を結びきれていない目で瞬きを数度繰り返し、眠気を払うよう首を左右に振る。

「大丈夫だよ。」

私、眠くなんてないよ。」

言葉の端々にあくびの気配を孕んだ口調。なのはを振り向いたフェイトの目は、両方ともきちんと開いてはいなかった。頑張つて開けようとしているのか、右の眉が妙に釣り上がってはいるけれど、赤い瞳が覗いているのは左目だけで、右目はぼつちりと閉じている。

たまに見せる、フェイトのとほけた表情。寝ほけた犬みたいなその様子に、なのはは小さく吹き出すと、フェイトの腕を引いた。

「もう、フェイトちゃんつてば。」

ほんの少し力を込めると、フェイトの体はなんの抵抗もなく横に傾いた。「んん、」と寝ほけた音がフェイトの唇から漏れるのを聞きながら、なのははフェイトを自分の膝に寝かせる。フェイトのツインに結わえた金髪が、膝の上に広がった。

フェイトがなのはを見上げた。自分の姿を映す瞳を覗き込んで、なのはは僅かに首を傾げて微笑んだ。「それに、私がこうしたいだけだから、ね？」

なのはは自分の膝の上に流れるフェイトの髪を指で梳いた。前髪を掻き上げるようにすると、フェイトがくすぐったそうに目を閉じる。

管理外世界、人のいなくなった街。そこに残る陽の破片と、肌に触れる夜の気配は冷たかった。なのはのほっそりとした指先が、黒いリボンを解く。衣擦れの音が鮮やかに舞い散る。

風が吹く。なのはは微笑むと手のひらを開いた。魔力で作り出されたリボンは、風の中、光の粒子に零れ落ちて、消えた。

「ねえ、なのは。」

残滓だけが幻視を未だ描く視界の先、フェイトがなのはの頭上を見上げていた。青に濡れる空。なのははフェイトの視線を追いかけるように、頭上の夜空を仰いだ。

西の空に、眩い星が一点、輝いていた。

大気の揺らぎに瞬く星。

「一番星かな。」

なのはは星を見つめたまま、フェイトに問いかけた。

「うん、そうみたいだね。」

寝転んで見上げる空は、まるで体を空に投げ出しているみたいだった。街並みごと飲み込むように広が

る夜空に星は一つきり。太陽の残した光が、他の星を彼から遠ざける。

「んー、あれって、地球だったら金星なのかな。」

西の方っていうか、太陽のほうにあるし、眩しいし。」

なのはがそう眩くよう言った。フェイトが頷く。

「うん、そうだろうね。」

太陽の傍を回る内惑星。太陽系で二番目に太陽の近くを回る星。天球で、太陽と月を除けば一番明るく見えるという星は、明けと宵にのみ現れる。夜空が去る頃に現れるか、夜空が現れる前に消え去るか。満天の星空と共にいることは出来ない星。たった一人きりの星。

「金星、か。」

フェイトの唇がその名を紡いだ。音は風に吞まれて吹き去っていく。

「綺麗な星だね。」

なのはの声が夜空に零れた。フェイトにはなのはの表情は見えない。見えるのは空と、金星だけ。フェイトは身じろぎをすると、目蓋を閉じた。その背を、なのはの手が撫でる。

「好きだな、私。」

なのはが微笑んだ。

フェイトが振り仰ぐと、なのはは金星を見ていた。

「一番星。」

きつと、空で一番綺麗だから、金星なんだね。」

指先に熱が集まる。緩やかに強くなる、閉じた目蓋の先に感じる桜色の光。

なのはは目を開いた。指の先に、生み出した光が一つ。掌ほどの大きさの、丸い光球。音もなくそれは虚空に佇み、静かに夜に染まっていく街並みから、なのはの手元を照らした。なのはの瞳に、桜の花弁が灼きつく。

なのはは指を放し、光球を空に解き放つ。光は視線の先で、遊ぶように悠然とした軌道を取り、頭上を舞う。なのはは左手を伸ばし、指先の方へ向け。

「ん。」

膝の上で転がった声に、その手を止めた。そうして、視線を膝の上に落とす。そこには、穏やかな寝息を立てる、フェイトの横顔があった。宵の光と、桜の色に彩られた、安らかな寝顔。

なのはは微笑むと、左手でフェイトの頬を撫でた。

そして、なのはは空へと光球を舞い上がらせる。

夜空に向かって伸びていく光は、徐々に点へと変わっていく。夜空に煌く星へ。西の空に輝く星へ。満天の星空が訪れる前に、金星が消えていく前に。

桜色の光は、なのはが空へと翳した手の向こうで、夜空の星になった。